行雲舎の本棚から　その７

芸術の秋にふさわしく、今回はちょっと趣向を変え、宇和島出身の画家・森本秀樹さんの画集『宇和島』と、図書室に飾っている森本さんの作品「遠い日」、最近訪れた個展について紹介します。

森本さんは、ふるさと宇和島を題材に、そこに息づく風景や暮らし、伝統文化を描き続けてきました。武蔵野美術短期大学で教えていた民俗学者宮本常一の影響を受け、市井の人々の暮らしや風物に温かいまなざしを向けています。

森本秀樹画集『宇和島』

「１９９８年夏、ふと思い出したように、それまで進めていた絵仕事を中断し、太平洋戦争特攻隊の生き残りであった父と過ごした宇和島の記憶の景色を描いたことから『宇和島』シリーズは始まった」。

ふるさと宇和島を題材にしたことについて、森本さんは画集の中でこう記しています。

画集には、「闘牛」や「みかんレールと海」といった宇和島を題材にした風景や風物が描かれています。写実的に風景を再現するのではなく、独特の色彩、タッチによって、記憶の中のその土地ならではの力強さや個性を抽象的に表現しています。

画集をめくると、風景だけでなく、その土地に暮らす人々の営みや地域の文化にも触れることができます。ふるさとを描くことは、その土地の記憶を残すとともに、見る側にも失われゆく風景や暮らし、地域の伝統文化の価値、大切さを気づかせてくれます。

森本さんが師とあおいだ民俗学者の宮本常一は日本全国を歩き、地域のお年寄りから日々の暮らしや伝統行事について丁寧に聞き取り、「失われた日本人」を著しました。森本さんの作品には、宮本の精神が脈々と受け継がれていると感じます。

絵画『遠い日』と個展「精霊の気配―宇和島―」

行雲舎の図書室に飾っている「遠い日」は、横４６センチ、縦５３センチの作品です。愛媛ゆかりの画家の作品ということで購入したものです。

ご本人いわく、「４０年ぐらい前の古い作品」であり、ふるさと宇和島を描いた初期の作品のようです。上部から並木、船と海と思われる記憶のなかの原風景が描かれています。抽象的な構成と抑制された色彩が特徴的な絵です。

その理由が、松山市内で開催された個展「精霊の気配―宇和島―」を訪れて、初めて理解できました。個展会場で、「記憶のモヤがかかった宇和島の景色は、父と過ごした幸せな

記憶と、戦争という歴史に翻弄された憂いが混在している」と、画家自身の言葉として紹介されていました。なるほど、少年のふるさとの記憶の原点には、父を通した戦争の痛みが内在し、このシリーズを描く動機となり、初期の絵にはその意識が色濃く表現されているのではと、腑に落ちました。

しかし、鑑賞した多くの作品の印象を通じて、作家のふるさとを思う心情の変化も察せられました。近作を集めた「精霊の気配」を中心に「抽象と具象の循環」「原風景―宇和島―」の 3 部構成で展示されていましたが、「麓の蜜柑山」や「夏の海」「おいのこさん」といった宇和島の風景や風物を題材にした作品は、淡く優しい色合いとタッチで、温かい雰囲気を醸し出していました。特に、老夫婦と犬を描いた「七十路（ななそじ）」は、ほのぼのとしていました。

子どものころに自然の中の不思議な気配を表現したという「精霊の気配」の一連の作品は幻想的な世界を柔らかく表現していました。人影がさまざまな形で登場しますが、これは漫画家つげ義春の影響を受けたということでした。

会場でご本人にお会いでき、画集にサインもいただきました。

行雲舎の本棚には、画集に加え、今回の個展の図録と２０１６年の個展の図録も並んでいます。図録は絵だけでなく、画家自身が書いた文章も魅力的です。

本を読むこと、絵を眺めること。そこから、知らなかった土地の文化に出会ったり、自分自身の記憶や大切な風景を思い出したりすることがあります。

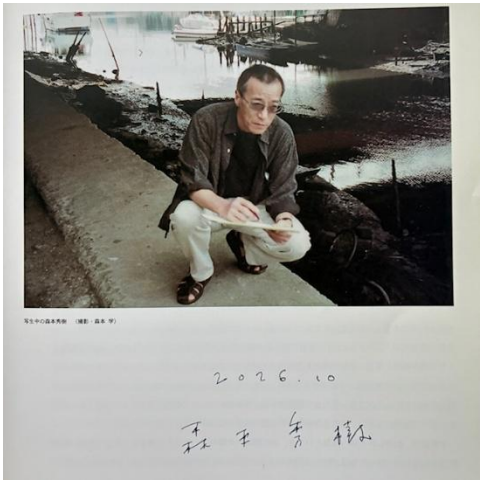
行雲舎にお越しの際は、ぜひ森本秀樹さんの画集「宇和島」を手に取ってみてください。そして、壁にかかる「遠い日」も、あわせてご覧いただけたらと思います。

2026 年 10 月

行雲舎

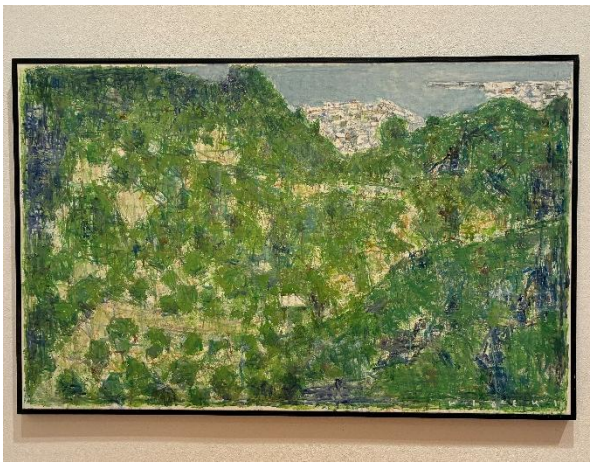
画集「宇和島」

宇和島を描いた作品「遠い日」



ご本人から、画集にサインをいただきました！

七十路などが展示されていた個展



「麓の蜜柑山」